【作文の部】

※作品内の表現については原文のまま掲載しています。

小学校 最優秀賞

「ジェンダーレスが進む社会へ」

末広小学校 ５年　長井　凛乃さん

私はサッカーをしています。ポジションはキーパーでとぶことが多いので、長い髪の毛がじゃまだなと思っていました。五年生になって、生まれて初めてベリーショートにしました。ついでにあこがれだったかりあげもしました。見た目はすっかり男子です。弟と間違えられるようになりました。でもみんなに「似合っている」とか「かっこいい」とか言われて、すごくうれしくて、「自分のやりたい髪型にして本当によかったな。」と思っていました。

ですが、夏休みに悲しい出来事がありました。サッカーの試合の帰りにお風呂屋さんに寄りました。そこで初めて、ジロジロと体を見られました。最初は気のせいかと思ったけど、何人もの人に見られたので、男とかん違いされているんだと気付きました。それだけなら気にしないけど、こっちを見ながらコソコソと何かを言っていました。言われている内容は分からなかったけど、いい内容ではないんだろうなぁと思いました。

サッカーの世界では、男子でも髪が長くてくくっている子もおれば、私のように女子でもかりあげてベリーショートの子もたくさんいます。それを笑ったり、コソコソ言われたりすることはありません。みんなしんけんにサッカーをがんばっていて、髪型なんか、なんでもいいからです。

今の社会はジェンダーレスと言われながらも、まだ考えが広まっていないと思います。昔、男の子のランドセルは黒、女の子は赤と言われていたそうです。ですが、今は女の子でも黒を選ぶし、私の弟は赤のランドセルを選びました。この先、「女の子みたい」と笑われることもあるかもしれませんが、自分が好きで選んだのだから、自信を持って背負って欲しいと思っています。小さな一年生が悲しい思いをしなくてもいいように、まずは大人から考えをアップデートしてほしいです。大人が個性を受け入れず古い考えにこだわっていると、子どもの自由な選択のじゃまになると思います。学校の先生たちも、男女の差別をしないように、一年生に教えるべきだと思います。サッカーは、男子のスポーツだと思われていましたが、なでしこジャパンのおかげで、女子の選手もどんどん増えています。私は男子のチームでプレーしていますが、やはり女子だからという目で見られることもあります。そういうのは、だいたい大人です。チームメイト達は、私を女子あつかいしません。男も女も関係ない！そんな世界が心地いいです。そんな世界が、もっと世の中に広まってほしいと思います。

人を見た目だけで判断するのではなく、一人ひとりの個性として受け入れられる社会になれば、イジメや自殺がもっと減ると思います。性別にとらわれて生きづらい生活をしている人もいます。そういう人達に心ない言葉を投げかける人もいます。まだまだ理解されていないのだなと感じます。私達が大人になるころには、少しでもジェンダーレスが進んでいるといいなと思います。

私の小学校は、今年から制服が男女共通になりました。もちろん私もズボンで登校しています。学校ではまだ数人しかはいている女子はいませんが、いい取り組みだと思います。こういうことのつみ重ねが、この先、性別でなやむ人の心を救い、生きやすい社会になっていくと思います。

小学校 優秀賞

「こころで気づく」

日新小学校 ４年　岩倉　柚実花さん

ある日スーパーへ行くととつぜん横にいた三十代ぐらいのおじさんが大声を出してさけんだ。私はびっくりして、どうしたのだろうと少し心配して見ていた。でも、周りの大人は見て見ぬふりをしてさけていた。周りの人はなぜ「どうしたの？」と心配にならないのだろうと思った。

急に大きな声が出たり、体が動いてしまう人がいることを知った。どうしたのかな？と一しょに買い物に行っていた家族とそっと見た。

初めて見た事なので私はびっくりしたけどなぜ、大人はさけているのだろう。見えているのに何も見えていない様にしているのだろう。もしかしたら本当に困っているかもしれないのに。

昔は障害のある人たちを見かけると「見たらダメ」「あの人どうしたの？」と聞くこともだめと言われてたらしい大人はいったい何に気をつかっているのか。大人はすぐに分かるかもしれないが私のような子どもには、すぐには分からないし、その人が何を伝えようとしているのか、どうしたのか知りたいから見てしまう。

ぎゃくの立場に立って、自分が買い物へ行きだれかに「見たらだめ」と言われていたら自分は自分のままでいるのに何かした？と悲しい気持ちになるだろう。

自分とはちがう人や、自分とはちがう事をしている時に「見ちゃだめ」と大人はさけている様に見える。でも、私は自分とはちがうからこそ気になるし、知りたいからこそ見て理かいしたいと思う。さけるのはかんたんだけど、理かいしないまま理由も分からずにさけ続けることになる。私はそれはちがうと思う。どんな人に対しても何かあった時に「どうしたの？」と思って気にかけることが大事。私は少し人見知りなので、困ってそうだなと何か気づいたらママや近くの店員さんに伝える様にする。見て見ぬふりはしない。困っていない時もあると思うので、そういう時はそっとしておこうと思います。まず知ろうとする気持ちが大切だと思います。「見ない気づかい」ではなく「見えない気づかい」にしていきたいです。

小学校 優秀賞

「わたしのおねえちゃん」

北中小学校 ２年　戸高　愛さん

わたしのおねえちゃんはてんかんと言うびょう気をもっています。ゆっくりなおねえちゃんです。

きた中小学校では、先生やお友だち、みんながやさしくおねえちゃんを見てくれています。おねえちゃんはきた中小学校大好きです。

でも、かぞくでおでかけすると、おねえちゃんは音がにがてでしゃがみこんだり、あばれたりします。

そのとき、ぎゅっとしてあげるとおちつきます。

でも、まわりの人は、じろじろ見たりいやなことを言ってる人もいます。

おねえちゃんにはきこえてないと思うけど、そんなこと言ったりやめてほしいです。

おねえちゃんもいっしょうけんめいにがんばっています。

ゆっくり、みまもってほしいです。

今おねえちゃんはでかけるときへるぷまーくをもっています。
みんなにへるぷまーくのことをわかってほしいです。
おねえちゃんこれからもがんばってね。

中学校 最優秀賞

「“ありのままの自分”でいるために」

長南中学校 ３年生　福間　柚さん
（題名とお名前のみ掲載します）

中学校 優秀賞

「十人十色な社会へ」

長南中学校 ２年　町谷　綺咲さん

私には、姉がいます。姉はバイセクシュアルで彼女がいます。姉にとって、彼女はふつうの恋人で、彼氏であっても、彼女であっても何も変わりません。姉自身も、周りの人達と何も変わらない私の自慢の姉です。だけど、世間は「恋愛や結婚は異性どうしでするもの」というイメージがあって、姉ような恋愛をしている人が否定されたり、生きづらかったりします。レズビアンやゲイ、トランスジェンダーなどの人もそうです。偏見や差別がまだまだあると思います。

日本では、同性婚が認められていません。政治家の発言をきいていると、ＬＧＢＴＱの人達の気もちをわかってあげれていないんじゃないかと思います。昔は、結婚相手を勝手に決められることがふつうにあったそうです。もちろんそれは異性どうしでの結婚でした。それが当たり前で、そうでなければいけないという意識があるのではないでしょうか。恋愛や性に対して寛容になって、ＬＧＢＴＱで苦しむ人の気もちをもっと考えてほしいと思います。政治家が少しでも理解を示すことができれば同性婚が認められる法律ができて、恋愛や結婚への心理的なハードルが下がり、誰もが生きやすい社会に近づくのではないかと思います。今の日本は、誰もが生きやすいとは言えません。そのことを政治家の人達には考えてほしいと思います。

去年、学校での人権学習で実際のトランスジェンダーのじゅんさんとその妻のゆかさんに学校に来ていただき、お話をきくことができました。私は、ゆかさんの「自由に生きればいい」という言葉がとても印象に残っています。確かに、周囲の視線が気になってしまうことがあっても、それをのりこえて自由に生きれたら、それはとてもいいことだと思いました。じゅんさんとゆかさんは、先日、ＮＨＫの「なれそめ」という番組に出ていました。お二人のような夫婦は珍しいからだと思います。私は、このお二人がわざわざクローズアップされることがまだまだＬＧＢＴＱに対しての理解が広まっていないことを表していると思います。お二人は理解を広めようという気もちでテレビに出たのだと思いますが、そういうことをしなくても、どんなカップルであっても特別扱いされない社会になってほしいです。そして、もう一つ思ったことは、政治家もゆかさんのような考えをもってほしいということです。私は小中学校で、人権学習をしてきたので、ＬＧＢＴＱの他にも、さまざまな人権問題について考える機会が多くありました。ゆかさんは「こんな学習をしてるのってすごくいいね」と言っていました。そこで初めて人権学習をすることが当然のことではないと知りました。そして、政治家

は、しっかりとした人権学習をしていないのだと思います。日本が変わるためには、全国の学校で人権学習をする必要があると思います。

私は人権問題研究部に入って、せんなんユース人権フォーラムや熱中フォーラムに参加しました。社会を変えるために自分にできることはあるのかなと考えて、自分には何もできないんじゃないかと思っていました。だけど、フォーラムでいろんな人の意見をきいたり、自分の意見をもって伝えることも、自分にできることだと教えてもらいました。また、最近、同性愛者に対して「気もちわるい」と言った人が身近にいました。これを姉にきかれたくないと思い、私はその人に「そういうことは言うとよくないんだよ」と伝えました。そんな発言をする人にいつも注意できる自信はないですが、言える時は注意もできるといいなと思います。

私は「ＬＧＢＴＱ」という言葉があるからその人達を区別して自分達とは違うと思ってしまうのではないかと思います。「ＬＧＢＴＱ」という枠をなくして、一人ひとりをみることができたらいいと思います。そんな枠で人をみるのは意味がないと思います。人は、十人十色です。どんな性の人であっても一人ひとりの色が認められる社会になるために、私は自分にできることをしたいです。

中学校 優秀賞

「私の居場所はたちばなだけじゃない」

長南中学校　３年　山田　心愛さん

私はたちばな学級では本当の自分を出せます。たちばなの子たちともたくさん話します。でもクラスでは自分をあまり出せません。

理由はわからないけど一人でもいいかなと思って自分からは話しません。そんな私だけど、修学旅行の班決めがきっかけで、みんなと話せるように変わりたいと思うようになりました。

沖縄の修学旅行で民泊体験をすると決まり、班決めをすることになりました。担任の先生に「自分たちで相談して決めてください」と言われ、どんどんみんなが班をつくっていくけど、自分は一人。「自分はみんなのところに入られへんねんな」と思って、さみしくて、落ち込みました。結局うまくまとまらなくて、決まりませんでした。

その日終学活が終わって、帰ろうとしていたら校門で支援の担任の先生に「暗い顔してどうしたん」と声をかけられました。そのとき、涙が止まらなくなりました。自分で解決しやなと思っていたけど、先生が気づいてくれた、と思いました。苦しいまま帰りたくなかったから、話を聞いてもらいました。すると、先生が一人のクラスメイトの子を呼んできました。その子は、教室で分からないところを教えてくれたり、困ったときに助けてくれたりする子でした。その子に、先生から、私が落ち込んでいることを話してくれました。すると、その子は「一緒の班になろう。大丈夫。」と言ってはげましてくれました。それで心が軽くなりました。

その日の帰り道、ゆっくり歩きました。修学旅行のことや、クラスのこと、いろいろなことを考えているうちに頭がグルグルしてきました。帰り道、家に着いたらお母さんにも相談しよう、と決めました。

家に着いたらお母さんに、話しました。

「修学旅行の話あるんやけど。」

「どうしたん。」

「みんながどんどん班作ってるんやけど、私は入られへんねん。どうしたらいい？」

そう聞くと、お母さんは自分が中学生だったときの話をしてくれました。

「ママも昔は耳があまり聞こえへんくて、友達は少なかったよ。だから同じような体験してきた。

ほんまは仲良くしたかったけど、できなかった。でも小さいころから知ってからわかる。心愛の周りにいる仲間はいい子ばかりやで。心を開いて話してみたらいいと思うよ。」

と言ってくれました。そのあとも、大人になってからでもたくさん友達をつくれることを教えてくれたり、何かあれば今日みたいになんでも相談してほしいと言ってくれました。お母さんに話す前は、修学旅行に行くことや、クラスの子を信じることが怖いと思っていたけれど、チャレンジしてみようと思う気持ちに変わりました。お母さんが、お母さんでよかったなと思いました。

次の修学旅行の班決めでは、私から「入れて」とは言えなかったけどクラスの子たちが「この班に入ってほしいな」と言ってくれて、私はほっとしたし、選んでもらってよかったなと思いました。私はここにいていいんだと思いました。

修学旅行当日、お母さんが空港まで送ってくれました。「楽しんで来て」といって見送ってくれました。私は、やっぱり不安もあったけど、帰ってきて思うのは、本当に楽しかったということです。民泊では、これまで話していなかった子とも話して、笑い合って、寝る前も十二時まで布団の中でいろんなことを話しました。大阪に帰ってきてから、学校が前よりも楽しくなりました。クラスでも、学年でも、居場所を感じます。今もたちばな学級の子以外の人に自分から話しかけることは苦手です。でも、みんなといろんな話をもっとしてみたいと思うようになりました。私の目標は、卒業式までにみんなに話しかけられるようになることです。卒業式まで、この仲間とたくさんの思い出をつくっていきたいです。